

主 題：クリスチャンが満足しないこと
 聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章12-14節

兎と亀の童話は皆さんよくご存じのことでしょう。兎はゴールを目の前にし、はるか後ろにいる亀を見て大丈夫と昼寝をします。今日のみことばから学んでいるときこの話を思い出しました。私たちの信仰生活の歩みにおいてもこのようなことをしてしまう、それがいかに危険なことか、正しくないことかを思わされました。兎は自分が勝つことを確信していましたが、結果はそのようになりませんでした。私たちクリスチャンには満足してはいけないことがあるのです。それをごいっしょに学んでゆきましょう。

今日の箇所、ピリピ3：12-14は、パウロがその生涯をかけて何を追い求めていたのかが記されています。それはまた、クリスチャンが追求して行くことです。それをより理解するために、少し前の3章の初めから見て行きます。1-3節では、偽教師たちに警戒しなさいとパウロは厳しいことばで話しています。偽教師たちが教えていたことというのは、行ないに基づく救いです。特にここでは律法を守ることによって、割礼を受けることによって救われるのだと強調されているのですが、それについてパウロの警告が書かれています。なぜなら、パウロ自身がかつてこの行ないによる救いを求めていたことがあった、その経験に基づいているからです。4-6節にそのことを述べているのですが、その生き方はクリスチャンを迫害することになったのだと言っています。ところが、パウロがダマスコに行く途上、キリストに出会うことによってその生涯が180度変わることになるのですが、今まで彼が求めていたこと、また実際に成してきたことよりも、はるかにすばらしいものがあることに気づくのです。むしろ、それに気づかされるのです。すべてに優るすばらしいものを得たゆえに、今まで彼が築き上げてきたすべてのことを、まるでちりあくたであると、はっきり宣言するのです。

彼が知ったものとは何なのでしょう？それはキリスト・イエスを知ることだとパウロは言います。8節にあります。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、…」パウロは信仰によって救われるのだと理解しました。それゆえに、それに逆らう教えをしていた者に厳しいことばをもって、ピリピの人たちに警告を与えるのです。キリストを信じたことによって、パウロはキリストと個人的な関係をもつようになりました。キリストが私の「主」となったのです。そして、パウロはキリストを知ることの価値をさらに理解してゆくのです。このすばらしさが分かるほどに、今まで生きてきたことのすべてがむなしなことだったと確信するに至るのです。このパウロの決断を見るとき、私たちにモーセの生涯を思い起こさせます。ヘブル11：24-26「信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」と、モーセもまたキリストを知ること「エジプトの宝にまさる大きな富」と言っています。パウロは続いてこう言います。3：9「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」と、この望みに優るすばらしいものはないのだと。そして、この「望み」とは確実に起こることがらに対する希望です。約束です。パウロは1：6でこう言います。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」と。

そして、パウロはただキリストを知って満足するに留まらないのです。キリストとの個人的な関係に基づいている希望というのは、パウロにもっと強い願望をもたらすのです。キリストをもっともっと知って行きたい、という願望です。10, 11節を見ると、パウロの願いは彼がクリスチャンとしてもっていた目標のゆえである、そこに私の心からの目標があるからと言います。「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」と、その目標とは、11節「死者の中からの復活に達する」ことです。永遠のいのちへの復活に達したいのだということです。この目標があるから、キリストと顔と顔を会わせるその時まで、もっともっとキリストを知ってゆきたいということです。私たちはそれにアーメンというほかありません。パウロが目標としたことは、私たち一人一人が目標とするべきことだからです。

ここで、この約束を得るまで私たちは何をするのが問われます。そのことがこの 12-14 節で教えられているのです。

★クリスチャンとして追求すること

パウロはここで二つのことを通して、私たちがどのようにこの目標に向かって歩いていくのかを教えてください。

1. 今の状態に満足してはいけない 12 節

1) 私たちが行なってはいけないこと、あってはならない姿とは？

私たちはある権威をもつ人の話を聞くとき、その人がその分野では完全な知識をもっているからそれが正しいと思い込んでしまいます。しかし、それは完全に正しいものとは限りません。専門家としての知識であってもそれは完全ではないことを覚えるべきです。パウロはキリストから使徒職を与えられ権威をもっていたのですが、パウロは自分が知識においても完全ではない、完全にはなっていないのだと言います。

12 節に「すでに得たのでもなく」とありますが、何を得たのかは書かれていません。これは、11 節にある「死者の中からの復活」を得ていない、一度もその経験はないということです。パウロは自分は完全な知識を得たことはないのだ言うのです。また、「すでに完全にされているのでもありません」というのも、今までの生涯において一度も完全ではなかった、ということです。I コリント 13 : 12 に「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」とある通りです。この二つのことを通してパウロは、ゴールである「死者の復活」には到達していないと言っているのです。

パウロはこの地上を歩いて行く上で自分はまだ完全ではないことが分かっていました。ローマ 7 : 15～を見ると、パウロの罪との葛藤が書かれています。また、II コリント 12 : 9 では「…ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」と、肉体の弱さも覚えていました。だから、キリストをより知り、追求して行くのだと言うのです。12 節で「すでに」が 2 回使われているのは「まだ」を強調しているのです。「まだ」到達していない、しかし、いつか到達する、今はその時ではない、という意味です。

2) 私たちがすべきこと

「捕らえようとして、追求している」、目標を追い求めることです。イエス・キリストを信じたことによって罪から救われ、キリストを主として歩み、日々キリストを知ることによって信仰がより確かなものにされると確信するのです。そして、目標であり、ほうびとして与えられること、すなわち、キリストに似たものへと変えられる、その時がやって来るのだと確信していたのです。しかし、そのような知識は、自分が神の前に正しく歩いて行こうとする努力を止めさせるものではないのだとパウロは言うのです。「追求する」とは、「走る、追いかける、あとを追って行く」という意味です。目標に向かって一心に追い求めてゆくこと、マラソンランナーがゴールを目指して一心に走るその姿です。

そして、パウロはこの神の約束＝死者の復活＝をただ待つのではなく、キリストを知るためにさらに追求して行くのだと言います。キリストに似た者へと変えられてゆくことです。なぜ、追求するのか、それは、キリストがまず初めに私を捕らえてくださったから、私をキリストに似た者へ変えようと神が私のうちに働いてくださったからだと言います。エペソ 1 : 4 でパウロはこう言っています。「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」。これが救いの目的です。「御前で聖く、傷のない者」とはキリストのことです。だから、全身全霊をもってキリストを追及してゆくのだとパウロは言うのです。

「捕らえる」は「得る」を強調したことばです。積極的に得る、占領する、占拠する、征服する、そして、迫害すると同じことばです。ゴールを目指して、これはクリスチャンがすべきことです。そしてまた、喜んでそれをしますという意志による決心であるはずで、クリスチャンは現状に満足してはいけないのです。今の状態に満足しないことです。兎は現状を見て大丈夫と思いレースの途中で満足してしまったのですが、私たちは到達に向かって一心に走るべきです。キリストを知りたい願いで一心に走るのです。もし、クリスチャンが現状で満足してしまうなら目標に到達することはないのです。神の栄冠を受けることは、今、神の前にどのように熱心に歩んでいるかによるのです。

2. 目標に到達するまで満足してはいけない 13, 14 節

「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはいけません。ただ、この一事に励んでいま

す。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」
ここから四つのことを見てゆきましょう。

1) 焦点をもっていること

目標が明確であるから集中して走るべきだと言います。「この一事に励んでいます」の「励んでいる」は原文にはありません。「この一事」とは「キリストに似た者となること」です。これが歩みの焦点です。まだこれには到達していないのだから目ざして励みなさいと言います。そして、このことは、私たちが日々の生活で負っている様々な責任を果たして行きながらできることであり、それを妨げることにはならないと言います。

2) 過去のことを振り返らない

これは過去の記憶を消し去ることではありません。過去を振り返ることが「焦点」をぼやけさせることにならないために、というのです。私たちが過去の罪の歩みにとらわれていると、焦点がぼやけてしまいます。パウロは言います。Iテモテ1:15「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた。』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」、また、使徒の働きを見ると、パウロがかつてクリスチャンを迫害していたことが記されています。彼はステパノを殺すことに賛成していたのです。しかし、このようなパウロが変えられたのです。Iコリント15:9,10「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と言います。神の恵みのすばらしさのゆえに、神を知って行きたいという願いをもつように変えられたのだと。ピリピ3:4-7にはパウロの経歴のすばらしさ、その偉業が記されていますが、それらがどんなにすばらしく偉大なものであっても、キリストを知るすばらしさには比べ得ない、とパウロは言うのです。

3) ひたむきに前に向かって進む

これは、筋肉を出来る限り伸ばして、というその状態を意味します。自分のすべてをもって目標に向かっていくのです。

4) 栄冠を得るために目を定めなさい

これがゴールです。14節の「上に召してくださる」の直訳は「上への召しという神の栄冠のために」です。これは「キリストに似たものに変えられる」ことです。一言で言うなら、空中再臨です。Iテサロニケ4:16,17にあるその時です。「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

ゴールに到達しなければ栄冠は得られないのです。この地上においては完全ではないけれど、完全を目ざして一心に歩いて行くこと、これがパウロが私たちに教えることです。私たちはキリストがいつ来られてもいいように、そのことを常に覚えながら日々の信仰生活を歩いて行くのです。心から神を礼拝し、伝道し、奉仕を成して行くことです。パウロは力強く言います。IIテモテ4:7,8「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」

また、Iヨハネ3:3「キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあるように、自分を清くします。」

パウロはピリピ3:17でこのように言っています。「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」と。栄冠を目ざしてひたすら走っていたパウロ、私たちもそのようでありたいと願います。今に満足してもし努力をしていないのなら、自分の信仰を吟味しましょう。

目標に向かって走りつづけて行くことが、私たちの証であるようにと願います。